

田村雅美さん（左）が製作したエビテーゼを着けるあやかさん。「人の目を気にする必要のない、ありのままの自分でいられます」と話す＝8月3日



読む
P h o t o
写真

新たな指に ともる希望

「たかが指先ですが、私にとってはエビテーゼが人生を豊かにしてくれています」あやかさん(25)は、右手の人さし指部分にシリコン製の人工ボディーパーツ「エビテーゼ」を装着している。エビテーゼとは、生まれつき、または事故や病気で失った体の一部を補うものだ。

美容師の国家試験を間近に控えた19歳の時、あやかさんは交通事故で右手の人さし指を失った。美容師になった後は利用客など周囲の目を気にして、肌色の指サックにティッシュを詰めて働いていたという。しかし、エビテーゼと出合い「人前で右手を出すことをちゅうちょしなくなり、人生が大きく変わった」という。精巧に作られた人さし指は、人体とほとんど見分けがつかない。「外出の際には家の鍵、スマホ、そしてエビテーゼが必需品ですね」と笑う。

これまで日本では、外見のケアはあまり注目されず、外見から生まれる苦痛は二の次とされることが少なかった。あやかさんも事故当時、医師から「指なんて誰も見ていない。無いことを受け入れなさい」と突き放されたという。現実を受け入れた

つもりでも、新たな日常は苦しい。それでも、誰もが自分の思い描く豊かな人生を送りたいと願う。長さ数センチのエビテーゼはその願いをかなえ、あやかさんが心の扉を開く鍵となった。

あやかさんのエビテーゼを製作し、その普及活動も行うエビティみやび代表の田村雅美さん(41)は「外見のケアは心のケアにつながり、社会復帰の一助にもなる」と話す。

国は今年3月に閣議決定した第4期がん対策推進基本計画で「がんとの共生」を掲げ、その中で初めてアピアランス(外見)ケアについて具体的に触れた。治療を続けながら社会生活を送るがん患者が増え、治療に伴う外見の変化をサポートすることが重要と考えたからだ。全国の自治体では、がん治療に伴う外見の変化をカバーするため、装着式の人工乳房や医療用ウィッグの購入を補助する動きが広がりをみせている。

しかし、外見のケアを必要とするのは、がん患者だけではない。

千葉県流山市では昨年4月から、がん患者以外でも病気や事故などで体の一部を失った人も助成の対象とした。2022年度は78人が申請し、うち3人はがん患者以外からの申請だった。同市健康福祉部健康増進課の大屋友範係長は「助成制度策定時に、実際にお困りの市民の声を反映させた。見た目を気にしないことで社会参加がより可能になればうれしい」と話す。隣接する同県野田市も、今年度から同様の助成を始めた。

田村さんは、欧米では知られているものの、日本ではまだまだなじみが薄いエビテーゼについて「もっと知ってほしい」と願う。そして「誰もが毎日を幸せに生きるために、今後も外見ケアへの認識や補助の動きがより広がることを望みます」と訴える。

【写真・文 内藤絵美】



田村さんの工房にあるエビテーゼの見本。「欠損した部分を単に補うのではなく、本物のような柔らかさや審美を大切にしたい」と話す＝東京都台東区で6月28日



もっと
知りたい